

『ジーニアス総合英語』 編集方針の3つの柱



中邑光男

『ジーニアス総合英語』を編纂するにあたって私たちが立てた編集方針は次の3点である。

- (1) 『ジーニアス英和辞典 第5版』(G5)と連携させる。
- (2) 分かりやすい説明を示す。
- (3) 必要に応じて、一歩進んだ説明を示す。

(1)の方針についてだが、生徒が総合英語で英文法を学んだ後で、問題集を解いたり、入試問題に挑戦したりするだけでは、もったいない。彼らが将来、英字新聞・雑誌・洋書などに親しみ、仕事でも英語を使えるように、学習上の道筋をつけたい。『ジーニアス総合英語』とG5を連携させることによって、生徒は『ジーニアス総合英語』を学んだ後、G5を活用して、スムーズに英語学習を続けることができるだろう。私たちが「総合英語の参考書と英和辞典を連携させる」という、これまでに例のない試みにチャレンジしたのは、このように考えたためである。

この連携作業の結果、例文に話を限っても、例えば「第5章 助動詞」の58のモデル文のうち、G5からの用例は31文である。さらにG5の用例を一部改変したものを含めると36文に達する。『ジーニアス総合英語』にはサブモデル文も多いが、それにもG5から多くの文を取り入れた。

(2)の方針については、文法項目の説明を、学習者にとって分かりやすいものにするだけでなく、例文を覚えれば文法のポイントを効果的におさらいできるように、例文の英語と和訳を徹底的に検

討した。

(3)の方針については、これまで総合英語で取り上げられることが少なかった項目でも、生徒が文法をより深く理解するために必要であるならば、一歩進んだ説明を示すように心がけた。

本稿では、この方針の(2)と(3)について、具体例、特に例文を挙げながら詳しく説明していく。

■分かりやすい説明を示す

1. ポイントが分かりやすい例文

第10章「比較」では〈A is no more B than C is D〉といういわゆる「クジラの公式」を取り上げた。『ジーニアス総合英語』ではこの構文の本質を「C is D は明らかに正しくないことの極端な例であり、その例に劣らないくらいA is B が正しくないことをA is no more B で表している」と説明した。そこで例文では、C is D のところに、明らかに正しくない内容を持つてくる必要があるのだが、これが意外と難しい。

例えばよく見かけるHe is no more a genius than I am. (私が天才でないのと同様に、彼も天才ではない。)は、「私が天才ではない」ことが、「明らかに正しくないことの極端な例」となっているが、この文だけでは「私が天才ではない」ことは分からない。

例文を検討した結果、私たちが採用したのは次の例文である。my little child のlittle がポイントで、「私の小さな子どもは弁護士だ」があり得ない極端な例としてふさわしいだろう。

He is **no more** a lawyer **than** my little child (is).
彼が弁護士でないのは私の小さい子どもが弁護士
でないのと同じだ。

このように、英文法のポイントが一目で分かる
ような例文を挙げた。

2. 多角的観点から練られた例文

〈(all) the+比較級+for ... [because ...]〉は
「第10章 比較」の重要構文である。この構文につ
いて、私は生徒の時に、I like him all the better
for his faults. (私は彼を欠点のためにますます
好きだ。)を暗記した。しかし、正直なところ、
この文の意味を当時は理解できなかった。この文
は、「私は彼のことを好きだ。彼には欠点がある
が、それがそのまま彼の特徴・個性である。だか
ら欠点があるからこそ、もっと彼が好きだ」とい
う意味だが、高校生の私には深すぎた。

この例文は当時の多くの参考書に掲載されてい
たために、私たちの頭には、〈(all) the+比較
級+for〉には faults のような「マイナスのこと
ば」が続くと刷り込まれた。しかし、コーパスの
COCAを見ると、for の後に「マイナスのこと
ば」が使われている例はなかなか見あたらない。
学習用英英辞典の用例も同様で、*Oxford
Advanced Learner's Dictionary* は You'll feel
all the better for a good night's sleep. (一晩ぐっ
すり寝ると、ますます気分がよくなるよ) のように
「プラスのことば」を続けている。

このような考察に、ネイティブ編集委員の意見
も加え、『ジーニアス総合英語』では、for の後
に「プラスのことば」を続けた。

I like him **all the better** for his sincerity.
彼は誠実なのでそれだけ、いっそう彼のことが好
きです。

このように、『ジーニアス総合英語』では、辞
書、コーパス、文法書などを使い、ネイティブ編

集委員の意見も取り入れながら、例文を多角的に
検討した。

3. 例文の和訳にひと工夫

「第5章 助動詞」では、依頼表現として Will
you ...?, Would you ...?, Can you ...?, Could
you ...? などを取り上げたが、生徒にとってこれ
らの表現の使い分けは分かりにくいだろう。他人
へ依頼する時に使う表現であるから、場面に合わ
せて使い分けられるように、それぞれの表現の
「丁寧さ」が気になるはずだ。

この章で示したモデル文は、Will you pass me
the pepper? である。Will you ...? は略式の表現
(*Collins English Usage*, HaperCollins, 2012) で、
「どちらかと言うと命令的な感じがあり、ていね
いさの度合いが少なくなる」(『実例英文法』、
OUP, 1988) と説明される。G5にも『『取ってく
れませんか』というていねいな依頼の意味には通
例ならない』という注がある。

これらの情報と例文の内容を考え合わせると、
Will you pass me the salt? は家族などの親しい
間柄で使われる表現だと言えよう。これを「コシ
ョウを取ってください」と和訳しては、そのニュ
アンスが分からない。そこで、私たちは次のよう
な例文と和訳を示した。

Will you pass me the pepper?
コショウを取ってくれる？

このように、英語のニュアンスがよりよく分か
るように、和訳にひと工夫を加えた。

4. 「ほぼ同じ意味」でも使い分けに注意

「第7章 不定詞」では、「形容詞の意味を限定
する」不定詞の例として、① It is difficult to
answer that question. と② That question is
difficult to answer. という英文を挙げた。通例、
この2文はほぼ同じ意味を表すと説明されるが、
『ジーニアス総合英語』では、表現は形が違うと
意味が違うという考え方に立ち、可能な限り、意

味・ニュアンスの違いや使い分け情報を示すようにした。

上の①と②との大きな違いは主語である。主語は、多くの場合、話題を表すので、この2文の違いを「注意」欄で、次のように説明した。

次の2つの英文はほぼ同じ意味だが、厳密に言うと、①ではit, つまりto answer that question (その質問に答えること)が話題だが、②はthat question (その質問)が問題となっているという違いがある。

- ① *It is difficult to answer that question.*
その質問に答えるのは難しい。
- ② *That question is difficult to answer.*
その質問は答えるのが難しい。

このように、ほぼ同じ意味を持つ文のニュアンスの違いをできるだけ分かりやすく示した。

■必要に応じて、一歩進んだ説明を示す

1. 生徒が持ちそうな疑問点をカバー

「第13章 名詞」では、物質名詞の量の数え方を取り上げた。①「形を表す名詞を使う」例としてa slice of cheeseなどを、②「容器を使う名詞を使う」例としてa bottle of milkなどを、そして③「単位を使う名詞を使う」例としてa pound of butterなどを挙げた。

私は、高校生の時に、「グラスでなく、カップで水を飲むことがあるが、あのような場合もa glass of waterと言うべきなのか」と疑問に感じた。しかし、その疑問に答えてくれる参考書は、当時なかったように思う。現在でも、私のように疑問を持つ生徒もいるだろう。そこで、次の注を付けた。

容器を表す名詞には実際に使ったものの名前を使う。例えば、「グラス」を使いジュース1杯を飲んだ場合はI had a **glass** of juice. と言うが、「カップ」で飲んだならI had a **cup** of juice. と言う。

このように、生徒が持つと思われる疑問を取り上げ、それに対する回答を示した。

2. 「使ってみたい」と思わせる有益な語法情報

「第24章 名詞構文・無生物主語」では、She took a look at Jim. (彼女はジムをちらりと見た。)をモデル文とした。このような名詞構文は、しばしば「英語らしい表現」とされてきたが、なぜそうなのかという説明はされてこなかった。

そこで、『ジーニアス総合英語』では、「もっとくわしく」という欄で、話し手の立場から一歩進んだコメントをつけた。

〈基本動詞+a/an+動詞の名詞形〉で使われる不定冠詞のa/anは、「ちょっとした」や「1回だけの」を意味する。そのためLet's **take a rest**. は「ちょっと休もう」の意味で、例えば勉強の途中で、「少しだけ休んだ後、勉強を再開しよう」という場合などに使う。これをLet's rest. というとき、比較的長い休みを表しているように響く。

同様に、Why don't you **take a look** at this book?と言うとき「この本をちょっと見て」という意味を表し、相手にあまり負担感を感じさせないような誘いの表現になる。

このようなことから、〈基本動詞+a/an+動詞の名詞形〉は、リズムがよいこともあって、話しことばでよく使われる。

このような情報があれば、生徒は自信を持って〈基本動詞+a/an+動詞の名詞形〉を使いこなすことができるだろう。

3. 「ふつう」の言い方を提示

「第4章 完了形」では定番とも言える「祖母が亡くなってから3年になる。」を取り上げ、①My grandmother has been dead for three years. ②Three years have passed since my grandmother died. ③It is three years since my grandmother died.を挙げた。

一般に、この3つの表現はほぼ同じ意味を表すと説明されるが、その説明だけでは、ふつうほどの表現を用いればいいのか生徒にはわからないだ

ろう。実際のところ、日本語の感覚からすると、①は多くの学習者にとっては違和感のある文だが、my grandmother を主語とし話題の中心としていることから、この文の内容を考えると、最もふつうである。(ちなみに②は3年が話題の中心になっており、誰かが例えば、「祖母が亡くなってから5年が経つ」と発言したために、「(5年ではなく)3年だ」と述べている文である。また③は②とほぼ同じ意味を表すが、②ほど唐突な感じは与えない。)そこで、『ジーニアス総合英語』では、次の情報を加えた。

現在完了形の継続用法を使った第1文目が最もふつうの言い方。

このように、できるだけ、「どの表現がふつうか」を示すようにした。

4. 実際の英語を踏まえた解説

「第23章 強調・倒置・挿入・省略・同格」の「同格」では、「名詞(句)の並列による同格表現」(例: Ms. Brown, our new ALT), 「ofを使った同格表現」(例: the state of New York), 「同格のthat節」(例: the fact that ...) を取り上げるのがふつうだ。しかし次のような同格表現は実際にはよく使われるのにもかかわらず、総合英語で取り上げられることは少なかった(下線部は筆者)。

Florentyna won and chose to speak first, a mistake she never made again in her life. (フロレンティナは[コイントスの結果]勝ち、最初にスピーチすることを選んだ。しかしそれは間違いで、彼女はその間違いを人生で二度と繰り返すことはなかった。) —Jeffrey Archer, *The Prodigal Daughter*.

そこで「もっとくわしく」として、次の一歩進んだ説明を加えた。

前文で使われたことばやその内容を名詞で表現し、それに関係代名詞節を加える用法がある。特に新聞・雑誌などでよく使われる。

Water boils at 100°C — a fact **that** you can easily prove yourself.

水は100度で沸騰するが、このことは自分で簡単に証明できる事実だ。

この例では、Water boils at 100°Cという文の内容を a fact とまとめ、それに関係代名詞節の that ... を加えたものである。

このように、実際の英語に目を向け、これまであまり取り上げられなかった表現にも注目した。

* * *

はしがきに書いた Every ounce of effort you make in learning English will be amply repaid to you later. (あなたが英語を学習する際に積み重ねたどんな小さな努力も、後に必ず豊富な知識となって身につく。)は私の大学時代の恩師のことばである。

この maxim の will は単純未来であり、話し手がある事柄が高い確率で、または必ず将来に起こると考えていることを表している。しかし、英語学習者にとって英語力は順調には伸びないことが多い。そのような時に「本当に私の努力は will be amply repaid to me later なのだろうか。本当は may (かもしれない) ではないのか」と悩む人も出てくるだろう。私もそうだった。

しかし、それでも、英語学習を続けているうちに、英語力が伸びたとハッキリと意識する時が訪れる。その時だ。「あの will は、すぐにくじけそうになる私のような学習者を励ましていたんだ」と気づくのである。恩師のこのことばが素晴らしいのは、will の持つ「励ます力」のためである。

生徒には、『ジーニアス総合英語』で英文法を学んだ後に、G5でさらに学びを深めてほしい。英語には、そのように学習を続ける価値があるからだ。そうすれば、この maxim に励まされる生徒がまた現れるかもしれない。その願いを込めて、私たちは『ジーニアス総合英語』をお届けする。

(なかむら みつお・関西大学教授)